

大島紬と泥染

紬は世界に知られる織物のひとつです。紬は手間暇をかけてきめ細かく織り上げられるポンジー（絹糸で織られる柔らかくマットな布地）です。紬を織るのに使われる技術の起源は 1300 年以上前に遡り、この織物はインドで最初に製造されるようになったとされています。中でも非常に高級な「大島紬」と呼ばれる奄美の紬は、歴史的に上品なデザインと繊細な染めの着物に使われました。昔から、島の女性たちは家計の足しにするため家の仕事の合間に自宅で紬を織っていました。江戸時代（1603-1867）の後半までには、大島紬は奄美大島の特産品となっており、島民はこの織物を（サトウキビと同じように）一種の税金として薩摩藩に納めなくてはなりません。奄美大島の女性たちは島を支配していた薩摩藩から紬の着物を着ることを禁じられ、この制限は奄美大島が日本の一部となった 1879 年に終わりました。近年では製造量は減少していますが、多くの織り手は今でも自宅で働いています。

泥染

紬の製造工程は、時間がかかり、繰り返しの多い数多くの手順を伴う複雑なものです。紬の製造は、図案を決めることです。図案によって、絹 100%の糸（縦糸と横糸の両方）を織る前にどのように染めるかが決まります。多くの図案は何世紀にもわたって使われてきた伝統的なデザインですが、現代の人々の好みに合わせて作られた新しい図案もあります。

糸は図案に応じて束ねられてから染められます。現地の言葉でテチギと呼ばれるシャリンバイの木から作られた染料で 20～80 回染め、泥（伝統的に水田の泥が使われます）で 1 回染めるのが 1 セットです。これが、3～4 回繰り返されます。シャリンバイのタンニンと泥に含まれる鉄分の組み合わせによって、大島紬の代名詞である伝統的な色味の黒が生まれます。青い色味に染める際には藍を使います。

織り

糸が解かれ、3 日間かけて織りの準備が整えられます。束ねた糸を解いた際、糸の染められている部分の長さや染められていない白い部分の長さはこれから織る図案を表しています。そして、織り手が織機の上に注意深く糸を並べる手織りの工程が始まります。この工程は高い集中力と技術を必要とします。1 日に約 30 センチのペースで織れる熟練の織り手でも、一反（13 メートル）の生地を織るのには 40～50 日かかります。

品質の保証

一反ずつ精査された後、大島紬には厳しい品質基準を満たしていること、泥で染められたこと、そして奄美大島で織られたことを認証する証紙が貼られます。地球の絵がついている証紙は、その製品が鹿児島県の他の地域ではなく奄美大島で製造された本場の大島紬であることの証です。大島紬は、伝統的な着物だけでなく、財布、電話ケース、コースター、カードケース、マスク、男性用シャツなどの商品やお土産品にも使われています。価格は図案の複雑さや織り手の技量によって異なります。島の観光オフィスで大島紬の製造工程を見学することができ、泥染めや簡単な織物体験も開催されています。